



Title	歴史的民族音楽学の必要性と可能性：とくにオセアニアの研究例に依拠した考察
Author(s)	山口, 修
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 1982, 16, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48160
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

歴史的民族音楽学の必要性と可能性

——とくにオセアニアの研究例に依拠した考察——

山 口 修

プロローグ

1. 「音楽とその周辺」と歴史的民族音楽学
2. 「対象地域の拡張」と歴史的民族音楽学
3. 「民族科学方法論」と歴史的民族音楽学
4. 史料としての演奏
5. オセアニアにおける歴史的民族音楽学の傾向
6. オセアニア歴史的民族音楽学研究の例

エピローグ

プロローグ

1885年にオーストリアのグイド=アドラーが『音楽学の範囲・方法・目的』という著作を『季刊音楽学』の創刊号の巻頭論文として発表して以来、⁽¹⁾ 音楽学を「歴史的音楽学」と「体系的音楽学」とに二分する方法は現在にいたるまで多くの国々で圧倒的な支持を受けてきた。そして将来も重要な指針として音楽学者たちを支配しつづけるであろう。しかしながら、多くの人々が今まで意識することがあったように、歴史的な研究の中にも体系的なアプローチを必要とする場合があるし、逆に体系的な研究といえども歴史的な配慮をほどこさなければならない場合がしばしばあるといえよう。とすれば、アドラーによる二分法は、厳密に区別すべき方法というよりは、どちらにどのような力点を置くかという形で役立てられていく

ば、十分に利用価値があるということになろう。

この小論では、一般に「体系的音楽学」の中の一分野とされている「民族音楽学」が、「歴史的な方向づけ」ないし「歴史的視野」により從事されうる分野でもあるという、すでにある程度公認された事實を再確認すること、あるいはそれを裏付ける根拠を再検討することを試みよう。その際に考慮されるべき歴史的事実として、アドラー以来今日に至るまでの間に研究対象が、ひとつには音楽それ自体をこえて周辺の事象にまでおよぶようになってきたこと、そして他方では、西洋以外の地域へも拡張していったことが挙げられる。

1. 「音楽とその周辺」と歴史的民族音楽学

音楽学の対象を音楽それ自体に限らず、周辺の事象にまでおよぼすことについて、もっともよく整理された形で提唱したのはチャールズ=シーガー⁽²⁾であろう。彼は、「体系的方向づけを基盤とする音楽学研究の構成摘要 Conspectus of the organization of musicalosical study upon a basis of the systematic orientation」という枠組の中で、第一のレヴェルとして、まさにこの観点を区分の基準としている。

I. 音楽について music viewpoint

II. 総体について general viewpoint

そして、第二のレヴェルとしてアドラーがもっとも重視した観点を導入しているのが興味深い。

A. 体系的方向づけ systematic orientation

B. 歴史的方向づけ historical orientation

さらに、第三のレヴェルに考慮されていることが、後述する「民族方法論」にかかわるものであり、将来の歴史的民族音楽学ないし民族的音楽史学に対する示唆を含んでいる。

1. 科学的方法 scientific method

2. 批判的方法 critical method

しかし、この第三のレヴェルで方法が2種類に区別されているのはよいにしても、より具体的な説明になると研究者の立場についての混乱があるので、私はここでさらに第四のレヴェルとして視点の違いを基準とする次の区別を提唱したい。

a. 文化内部者の視野 perspective of culture-carriers

b. 文化外部者の視野 perspective of culture-noncarriers

すなわち、シーガーのもとの枠組の第三レヴェルに含まれていた要素をひとつぬき出して第四レヴェルとしたことになり、それに応じて第三レヴェルを定義しなおさなければならない。すなわち、

1. エティックな方法 etic method

2. エミックな方法 emic method

と置き換えるとより明らかになるであろう。もとの「科学的方法」「批判的方法」を固守してもよいが、その場合には、エティックとエミックの対比を考慮に入れた方法区分とするのが妥当であろう。したがって、「科学的かつエティックな方法」とは、機械を使って測定値を出すことに代表されるような、いわば客観的な方法であり、逆に「批判的かつエミックな方法」とは、各個人が先天的にそなえた気質や後天的に獲得した趣味に意識的に準拠する主観的な方法なのである。

これら4つのレヴェルそれぞれにおいて意識をはっきりさせることにより、「何を、どの方向に、どのように、誰が」研究するのかがおのずから明白になるであろう。もちろん、すべての音楽学的研究が、このような形で因数分析的に性格づけられるというのではなく、現実には、それぞれのレヴェルで、ある時は一方、別の時には他方、さらにまた別の時にはそれらを併合ないし統合した形で研究をすすめることの方が多いであろう。そ

の際に問題となるのは、こうしたことを意識しているかどうかによって、ある研究が社会にとって価値あるものとなりうるかどうかが決定されることである。たとえば、日本の伝統音楽を、歴史的な方向づけと、「エティックな方法で」研究しようとしている意識はもっていても、自分が「ヨーロッパ音楽の視野」にしか立っていないのに、そのことに気がつかないで研究をすすめれば「エティックな方法」はその瞬間に有効性を失ない、そこから得られる成果は「ヨーロッパ中心的な」偏見に満ちたものとなってしまうであろう。⁽³⁾もしもこれらの作業がすべて明白な意識をもってなされれば、たとえば「ヨーロッパの観点に意識的に根ざした（エミック・エティックな）比較」も可能であるのに。

ともかく、以上のような枠組にのっとって音楽学研究は音楽のみならず音楽を直接あるいは間接にとりまく周辺の文化事象にもおよぼされてきている。このことがもっとも端的に論究されているのは、社会科学一般との関連で書かれたギルバート=チェイスによる「アメリカの音楽学」と、⁽⁴⁾文化および社会人類学の立場によるアラン=メリアムの「音楽人類学」⁽⁵⁾であろう。チェイスは、歴史学一般との共通点、すなわち「過去を問わなければならぬ」⁽⁶⁾ことが文化人類学にはあり、その意味で文化人類学が歴史的方向づけをとらざるをえないといし、さらにこの延長線上に音楽学研究を位置づけ、そのような「社会文化的アプローチによる音楽学」を「文化音楽学 cultural musicology」と呼称することを提唱している。⁽⁷⁾一方、メリアムの書の中で歴史的民族音楽学に関連する章としては、「第十四章、音楽と文化史 Music and Culture History」と「第十五章、音楽および文化的動態 Music and Cultural Dynamics」がまず挙げられる。そして文化史一般の構築のために音楽を「復元する」こと、進化論や伝播論に照らし合わせることが、歴史的文書、歌詞研究、考古学的調査などの援用によってすすめられることが若干の例とともに説かれている。さらに、文化の動態を

変化 change と置き換え、それが文化の内面から生じる場合の「革新 innovation」と外面的変化としての「文化変容 acculturation」に対立されて論じられている。その論旨の上で目立つ彼の方法は、あたかも諸民族の例を客観的に観察しくらべることによって、いわばエティックかつ普遍的な原理による変化理論が構築されうるとしているような印象をあたえ、その意味では文化的相対主義に反する立場となり、注意を要する。⁽⁸⁾

メリアムの書では、さらに「第六章、身体行動と言語行動 Physical and Verbal Behavior」、「第八章、学習 Learning」、「第九章、創作の過程 The Process of Composition」などの中に歴史的民族音楽学の可能性につながる論究、すなわち伝承や演奏についての諸民族の事例への言及が散見されるが、これらの側面、とくに演奏そのものの中に時間性があり、それが歴史性とも関連するという側面は気づかれていない。

従来の民族音楽学者たちは、「音楽の周辺」に目を向けてはきたものの、依然として音楽に直結した周辺、たとえば朗唱や舞踊などにしか注意が払われていないように思われる。おそらく、今後は一見関連のない人間の行為にも留意して、そこに隠されている歴史性を参考にすることが必要になってくるに違いない。

2. 「対象地域の拡張」と歴史的民族音楽学

音楽学におけるもう一つの傾向、すなわち全人類の音楽文化へと拡張されてきたことのきっかけは、まさに歴史的な観点からであった。ただし、これは単純な進化論によっていて、いわゆる「高文明」地域の音楽史の初期の段階での音楽の姿はどうであったかを探るためのヒントとして「未開地域」そしてそれについて「東洋高文化」の音楽の記述を載せるという、そこに扱われた国々・地域の人間にとてはまさに屈辱的な形をとっていたし、今でもこの傾向が多少残っている⁽⁹⁾。もちろん、これは是正される傾

向にあり、全世界を扱うシリーズで前の方を飾るためのものではなくなり⁽¹⁰⁾たり、改訂された辞典類で旧版よりもはるかに多くのページ数を西洋以外の地域にあてることが目立ってきている。⁽¹¹⁾しかし、いまだに配分率は不⁽¹¹⁾当に低いものであることは否めないが、これは現実に研究成果の実績に差があるためでもあり、将来この間隙が埋められていくことを期待しよう。そのためにも、文字・楽譜をもつ文化、もたない文化いずれについてもそれぞれの音楽史を今以上に充実した形で記述するための資料を収集したり、それを分析するための方法論を確立する必要が叫ばれるのである。

歴史的民族音楽学が将来ますますさかんになるであろうことは容易に予測できる。「第三世界」で独立国が次々と誕生するにつれ、各地で文化的アイデンティティの新たなる確立が求められるとき、音楽・舞踊・演劇といった芸能一般の伝統の歴史と現代的革新が問われることがしばしば見受けられるからである。そして、そのために国家的補助のもとに芸能の過去を探って新しい創造に役立てようという傾向さえ現われてくるのである。また、たとえ国家的支援がないにしても、急速に機械文明が浸透するにつれて、一部の人々が伝統遺棄の前に立ちふさがり自らの文化の歴史を子孫に残そうと努力する姿を見せてくれたりする。この小論の後半では、オセアニアでのこうした状況を概観するのであるが、オセアニアに限らず、このような地域での歴史的民族音楽学がどのような方法論をどのような資料分析に応用しうるか考察する必要がある。

3. 「民族科学方法論」と歴史的音楽学

世界各地に存在する異なる価値体系が是認されるにつれ、学問のあり方、方法論も現代的な状況に対応しうるもののが要求される傾向はますます強まるであろう。そして、選択可能ないくつかの方法論の中でもとりわけ意義を増大していくと思われるが「民族科学」ないし「民族方法論」⁽¹²⁾、「民族(俗)

評価⁽¹⁴⁾といった一連の熟語に表わされる類のものである。この方法論の基本的な立場は、以前には少くとも学問の場では問題にされることのなかつた日常的なレベルでの人間の行動や、「大文明」から放射される影響力において無視される傾向にあった「周辺的な」諸民族・諸集団が伝統的に培ってきた文化、といったものを重要視することである。

すなわち、異なる文化価値を是認する文化的相対主義の立場を徹底し、エミックな方法を駆使する研究が助長されなければならない。その具体的な手順は、対象とする人間集団が保有している語彙・語句・文法・文体を手がかりにしてそこにくりひろげられる「意味の世界」を探りをいれることであり、さらに、言語に表現されていない知覚的な「意味の世界」にも足を踏みいれる必要があり、音楽の場合、演奏への直接的参与ないし観察という手順により、これが可能となる。こうした方法論に裏付けられたものこそが「民族音楽学」と呼ばれるべきものであり、ただ単に「諸民族」の音楽を対象とするというだけでは学問名称の根拠として不十分である。⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾

ところで、一般に歴史学においては、研究資料として「書かれた記録」とその年代決定に対してほとんど絶対的といってよいほどの史料価値が置かれ、「口伝」による情報は無視される傾向が強かった。しかし、民俗学や文化人類学の台頭と隆盛につれ、「口伝」のもつ研究資料としての価値——当然、歴史的研究のための史料ということも含めて——がますます高く評価される傾向にある。⁽¹⁷⁾「歴史的な」方向づけと「エミックな」方法をとるべき「歴史的民族音楽学」は、この傾向を大いに参考にしなければならない。ところが、音楽、ときには舞踊や演劇などの研究にたずさわる民族音楽学者にとっては、「書かれた資料」「口伝えによる情報」だけでは、史料が十分ではない。広義の「口伝」に含まれる「演奏」そのものも史料となりうるし、なるべきであると思われる。

4. 史料としての「演奏」

民俗学の分野では、欧米、とくに合衆国においてフォークロアを「伝達 (communication)」と「演奏 (performance)」という観点から動的に把握することが顕著になってきている。⁽¹⁸⁾ 従来は、語られたり歌われるときの言葉を書きとめた「文字化されたテキスト」だけが資料価値をほとんど独占していたが、もっと他のところにもフォークロアの本質が露呈されないと見るようにになってきたのである。すなわち、簡潔にして的確なベンアモスとゴルトシュタインの表現を借りれば次の通りである。

フォークロアを脈絡の中で (contextual) 研究するとき、[ことばとしての] テキスト (text) を記録することは必要であるが、それだけでは十分ではない。すなわち、近接学的 (proxemic), 動作学的 (kinesic), 擬似言語学的 (paralinguistic), あるいはこれらの相互作用という観点から記述することが必要である。これらすべてがなされれば、フォークロアの伝達過程とその上演上の特質 (performing attributes) を支える原理を解きあかすための鍵が得られることになる。⁽¹⁹⁾

ここで使われている performing, そして performance は、音楽の場合は「演奏」であり、舞踊・演劇などでは「上演」、日常言語の場合は「運用」ということになり、これらすべてを含む、事象文化の一項目とすることができる。ただし、日常言語の「運用」という意味での performance だけは、例外的である。なぜならば、他のものは日常的なレベルから多かれ少なかれ遊離した場で行なわれる「芸術」ないし「擬似芸術」——一種の偏見を覚悟で言えば——の領域に入るるものであるからである。その意味ではデル=ハイムズによる performance および関連用語の定義は正しい。

まず行動 (behavior) がある。これは単に、何でもよいから生起さ

れる場合である。次に、行為 (conduct) がある。これは行動の一種であり、社会的規範、文化的規則、解釈可能性の原理といったものに則した行動である。そして上演 (performance) がある。これは一人にしろ複数の人間にしろ〔行為による〕表示 (presentation) に対して責任をとるときである。⁽²⁰⁾

このような、「非日常的な芸術性」を度合の差こそあれ備えた performance が、テキストも含めたすべての側面において音楽学、とりわけ民族音楽学の研究資料として重要なことは明らかである。そして performance が歴史的民族音楽学にも役立てられるべきであるとする根拠がここで明らかにされなければならない。

二重の意味で、performance は「時間性」という特性をもった文化事象であるということができる。第一に、音楽・舞踊・演劇・伝説語りなどの performance は、始まりと終りのポイントにはさまれた絶対的な時間帶の中で繰りひろげられる文化的時間（音楽的時間・演劇的時間等）の世界であるということは、西洋の伝統的美学からの援用をまつまでもなく明らかである。たとえ革新的な工夫がこらされてはいても、演者自身が文化的に規定された存在であり、演目自体もその背景に世代を超えた過去を凝縮したものとみなすことができる。ベンアモスは別の論文において、これに関する用語「集団による再創造 (communal re-creation)」について次のように論じている。

「再創造」の概念が「創造」の概念と違うのは、創造が行なわれるときの時間持続の点においてである。〔中略〕言語芸術 (verbal art) は、ある共同体が時間を超えて創造したものとの総体である。〔中略〕「集団による再創造」という考え方は、フォークロアともう一つの要因、すなわち時間性 (time depth) [時間的な深さ、時間的な隔たり] との関係を呼び起こすことになる。⁽²¹⁾

このようにして、歴史的民族音楽学にとって「演奏」それ自体が史料として利用し得るものであるということが基本的に了解されるであろう。もちろん、史料はこれだけではなく、演奏以外のさまざまな口承による知識、文字・楽譜あるいは図像として書(描)きとめられた形で残っているもの、楽器などの現物（考古学による発掘物も含めて）などすべての入手可能なものを駆使しなければならないことはいうまでもない。

5. オセアニアにおける歴史的民族音楽学の傾向

以上に概略を試みたように、歴史的民族音楽学は大いに可能性を秘めた研究領域である。以下、この枠組に照らし合わせながら、オセアニアにおける歴史的民族音楽学の動向を若干の研究例に即してたどり、あわせてそこに欠けている、これからなされるべき研究活動をいくつか提唱したい。

さて、オセアニアの文化にたずさわる人類学・民族学一般その他においてつねに顕著でありつゝしてきた関心領域は、主として次のような事柄であった。まず第一に、広大な海域に散在する大小の島々にくりひろげられてきたオセアニア文化の担い手たちが、一体いつごろ、どのような経路で、どのような交錯を経ながら、現在の民族分布の状況に至るようになったかという問題である。これについては、おびただしい（とはいってもまだ十分でない）研究例に依拠した概観が考古学者ピーター=ベルウッドや言語学者アーサー=キャペルにより提示されているし⁽²²⁾、類似の論文が相次いでいる。まさに歴史的な関心事であるこのオセアニア文化の起源と変遷というテーマについての民族音楽学の分野からの貢献は、その可能性がはやくから意識されてはいたが、主に人材不足という理由から、顕著な実績はまだあらわれてはいない。将来、組織的なプロジェクトにより追求されるべき問題である。

第二に、第一の問題と関連して、全オセアニア文化が地理的にどのように

に区分されるかという、文化の区分と分布の問題がある。この問題については、ダグラス=オリヴァーによる書など一般書も多く、音楽学の分野でも大きな問題点を残しながらとはいへ全域を包括した試みがハンス=フィッシャー⁽²³⁾とメルヴィン=マックリーン⁽²⁴⁾⁽²⁵⁾によって試みられている。分布の問題は、フィッシャーの扱った楽器にしろ、マックリーンが主要な項目として扱った音楽様式ないし構造の問題にしろ、一見共時的な研究テーマのように見えるが、先に述べたように「演奏」のもつ時間性と、まさに時代を超える「伝承」に支えられたことであるために通時的な要素も含んでいるので、各地域に即してモノグラフ的に提示されたデータを通時的な配慮なしに、すべてを同一平面上に並べることには問題が残されているといわなければならない。にもかかわらず、上記の2論文は、音楽学のみならず他の分野にも貢献する意義深い研究成果であると評価することができる。またバーバラ=スミスとエイドリアン=ケプラーの著作も簡潔にして要を得た概略である。⁽²⁶⁾とくにケプラーのものは舞踊を扱った数少ない文献の一つである。

第三の関心領域は、モノグラフとして一つの文化なり共同体に集中した記述分析であり数量ともに前の2つのテーマをはるかに凌駕している。人類学・民族学一般での例はともかく、音楽学の分野での例を若干挙げると次のようなものである。ポリネシアに関してはパロウズ（ツアモツ）、⁽²⁷⁾ロバーツ（ハワイ）、タタール（ハワイ）、モイル（サモア）、⁽²⁸⁾⁽²⁹⁾ケプラー（トングア）、⁽³⁰⁾メラネシアに関しては、ゼンブ（アレアレ）、⁽³¹⁾⁽³²⁾チエノウェス（ウサルファ）、⁽³³⁾ミクロネシアに関しては山口（ベラウ）⁽³⁴⁾といった論文である。これらのモノグラフは、共時的にそれぞれの音楽文化を記述することに加えて、歴史的変遷をたどる試みがなされたり、過去のある時期の音楽文化を再構成したりしている点で、歴史的民族音楽学の研究の一つのタイプを示しているといえよう。

第四のタイプとしてまとめられるその他諸々の研究は、おおむね何らかの主題（たとえば「音楽構造」「音楽と社会」）に的をしぼったもので、それらの中に歴史的民族音楽学の好例を見出すことができる。この小論では、それらの中から、「書かれた記録」をもとに歴史的なある時期を再構成した例と、「書かれた記録」に加えて、「古い録音」「現在の演奏」の照合により再構成と変遷追跡を試みた例をとりあげて問題をひろい出そう。（なお、以上4つのタイプのオセアニア音楽研究の文献はマックリーンによる文献集成にかなりよく網羅されている。⁽³⁵⁾

6. オセアニア歴史的民族音楽学研究の例

オセアニアの中でも、早い時期から西洋文明との接触が始まり急速に文化変容の多様な形を見せてきたのはミクロネシアやメラネシアではなく、ポリネシアであった。その中でも、現在ヨーロッパ人種が支配する国、あるいは国的一部となってしまったニュージーランドとハワイのそれぞれのポリネシア文化、すなわちマオリ文化とハワイ文化に関する歴史的研究が音楽や舞踊についても一番多くの成果をあげているようである。それはおそらく、文字で記録を残すということが後住民によってかなり広汎に行なわれてきたことの現われであろう。ここにとりあげる2つの論文も、これら2つの文化についてのものである。第一にスザンヌ=ヤンガーマンによる「18世紀以後のマオリ舞踊」⁽³⁶⁾、そして第二にエリザベス=タタールによる「〔ヨーロッパと〕接触する以前のハワイの音楽の記述に向けて」⁽³⁷⁾である。

この2つの論文は、書き残された記録をかなり徹底的に吟味している点で共通している。とくにタタールは新聞記事や商店元帳の類にいたるまで書かれたものに出てくる音楽関連用語をひろい出し、それらを音楽のジャンルとその用途にかかる分類用語群と、音楽の音にかかる記述用語群とに大別している。しかも、書かれた記録を史料として重要視することが

できる根拠を述べていることが注目される。すなわち、タタールによれば「ハワイの人々は〔物事に〕名称をつけ類別することへの関心が深いので、伝導師たちが〔1820年以来〕読み書きを教えて以来、家系、〔伝統的〕祈祷、植物の名、地名、医療習慣などが歌謡のテキストとして出てくるものなどを書きとめるようになった」という。⁽³⁸⁾そのため、接触以前のハワイ音楽の再構成という目的をかけた研究にとって、接触直後から始まった「書きとめる」習慣によって残された記録を利用することが正当化されるとしている。タタールは、エミックな、文化内部からのデータが得られた点で幸運であった。反対にヤンガーマンは、エミックなデータを求める意図はもっていたが、⁽³⁹⁾外部者による記録だけを頼りにせざるを得なかったとしている。しかし、18世紀を扱ったヤンガーマンがタタールと同じように、扱う時期よりも後（直後）の時代にも目を向けていたら、エミックな観点をいくらかでも導入する余地があったかもしれない。もちろん、わずかの違いとはいえ、無条件に後の時代のデータを導入してよいわけではないが。

さて、航海者、伝導師といった外部者による日記その他の手記の扱いという点では、2人に対する評価は逆転せざるを得ない。なぜなら、ヤンガーマンの徹底した史料吟味に対して、タタールはほとんどこれを行っていない。しかしながら、ヨーロッパ文化との接触の時期およびその以前のポリネシア音楽文化を再構成することが目的の一還となっているこれら2つの論文のこの大きな違いは、おそらく2人自身の手で小さくされていくであろう。というのも、これらは類似のテーマを扱ったこの2人のそれぞれ最初の論文であるから。事実、タタールがその後に出版した書「19世紀のハワイの歌謡」では外部者の記録も扱われているし、ヤンガーマンも現代のマオリ文化の知識と比較するなど後の時代へと変遷をたどる意図を暗示している。

結局、ポリネシア音楽の歴史を扱う2人の研究者の違いは、出発点の違

いであるようである。ヤンガーマンが、時折、現代の事実と照らし合わせることをしているとはいえ、基本的には比較的容易に着手し得る最古の時代から出発して現代の方向に向かおうとし、その際に、その時代に直接関係する史料のみを扱うという態度を貫いているのに対して、タタールは現代のハワイ歌謡の演奏から出発して、利用し得る最古の（1930年代）の録音と比較し、その違いに留意しながら、19世紀の文書類を吟味することによって1820年の接触より以前の音楽文化に接近するという全く逆の手順をとっているのである。

こうした2人の手続のとり方の違いは、それぞれ将来の可能性を示していく興味深い。しかし、ヤンガーマンの手続は従来の西洋的な歴史学の方法を想起させるし、タタールの手続きが文化人類学的であるので、今後統いて発表されるであろう成果の違いに注意を向ける必要があろう。一つ予測できることとしては、西洋以外の文化を対象とするとき、時間の観念、そして歴史意識の違いが西洋との間にあると考えられるので、通時的な研究はそれぞれの文化の時間意識をある程度反映させた、すなわち民族科学的な方法の方が、その文化の担い手にとって意義深い結果が得られるに違いないということである。

エピローグ

歴史的民族音楽にとって重要な史料として、従来利用されてきた文書類以外に古い録音があることがタタールの仕事で暗示されている。そして、これに加えて現代における演奏自体も役に立つことがやはりタタールによってわずかながら示されている。しかし、おそらく、これらはもっと多くの利用価値があるはずで多くの人が多くの文化に即して多くの研究を試みることによってそれが明らかになるであろう。

そのためには、現代の演奏状況をフィールドワークによって視聴覚資料

として徹底的に記録することが必要である。そして、多くの国や個人のところに散在する古い録音その他の資料を当該文化の中に集中してもどすことが望ましい。なぜなら、外部者が集めた資料であっても、内部者は容易にエミックな方法でこれらを評価することができるはずだからである。

最近のオセアニアの諸地域で、博物館や文化センターの類が次々と生まれ、古い資料のとりかえし運動や、現地出身のいわゆる paraethnomusicologist⁽⁴¹⁾——本職とはしないが、ある程度の訓練を受けてフィールドワークその他の研究を行なう人——に依頼して現代における演奏の記録を実践している例が目立ってきてているのは注目に値する。そしてこれらの動きの根幹を成している方針は、現地の人々の利益を重視し、現地の人の力でこれを達成しようということである。もちろん外部者が参与する可能性は残されているが、将来のあるべき姿としては、現地側の動きと連関した形で、しかも個人のレヴェルだけでなく研究機関（大学や博物館）の提携による組織的な計画にしたがっておしえすめていくことであるように思われる。

注

- 1) ADLER, Guido, "Umfang, Methode und Ziel der Musikwissenschaft." *Vierteljahrsschrift für Musikwissenschaft* 1 (1885) : 5 – 20. なお、この論文の註釈つき英訳が出された。
MUGGELSTONE, Erica, "Guido ADLER's 'The scope, Method, and Aim of Misicology' (1885) : an English Translation with an Historico-Analytical Commentary." *Yearbook for Traditional Music* 13 (1981) : 1 – 21.
- 2) SEEGER, Charles, "Systematic Musicology : Viewpoints, Orientations and Methods." *Journal of the American Musicological Society* 4/3 (1951) : 240 – 248. その骨子はシーガーの代表的な著述をまとめた論文集の序章として再録されている。
SEEGER, Charles, "Introduction : Systematic (Synchronic) and His-

torical (Diachronic) Orientations in Musicology." *Studies in Musicology* 1935 – 1975. Berkeley, Los Angeles and London : University of California Press, 1977. 1 – 15.

- 3) まさにこのような例があり、それに対する文化内部者からの批判とそれに対する原著者の弁解・反論が公にされている。
ADRIAANSZ, Willem, "Research into the Chronology of Danmono" *Ethnomusicology* 11/1 (1967) : 25 – 53.
KIKKAWA, Eishi/ HOLVIK, Leonard, "Letter to the Editor." *Ethnomusicology* 12/1 (1968) : 164 – 166.
ADRIAANSZ, Willem "Letter to the Editor." *Ibid.* : 166 – 171.
- 4) CHASE, Gilbert, "American Musicology and the Social Sciences." BROOK, Barry S./ DOWNES, Edward O./ VAN SOLKEMA, Sherman (eds), *Perspectives in Musicology*. New York : W.W. Norton & Company, Inc., 1972. 202 – 226.
- 5) MERRIAM, Alan P., *The Anthropology of Music*. Evanston, Ill.: Northwestern University Press, 1964. (邦訳) 音楽人類学。藤井知昭／鈴木道子共訳、東京：音楽之友社、1980。
- 6) CHASE, op. cit. p. 217.
- 7) CHASE, op. cit. p. 220.
- 8) 文化の様相も、それを支える根拠ないし価値体系も、相対的なものであり、換言すれば、文化毎にそれらが異なるとする立場で、これについて論じられたものに次のものがある。
MEYER, Leonard B., "Universalism and Relativism in the Study of Ethnic Music" *Ethnomusicology* 4 : 49 – 54.
- 9) たとえば、WELLESZ, Egon/ WESTRUP, Jack Allan/ ABRAHAM, Gerald (eds), *The New Oxford History of Music*. London : Oxford University Press, 1954 –.
- 10) たとえば、HITCHCOCK, H. Wiley (ed), *Prentice-Hall History of Music Series*, Englewood Cliffs, N.J. : Prentice-Hall, Inc., 1965 –. では西洋音楽史の常識的な時代区分による各巻と並んで、西半球、東半球、アメリカ合衆国にそれぞれ1巻ずつあてられているし、改訂版でさらに内容が充実したりしている。
- 11) たとえば、SADIE, Stanley (ed), *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. London : Macmillan Publishers Limited, 1980.

- 12) KAY, Paul, "Ethnoscience." in : HAMMOND, Peter B. (ed), *Cultural and Social Anthropology : Introductory Readings in Ethnology*. New York : Macmillan Publishing Co., Inc., 1975. Reprinted from : KAY, Paul, "Some Theoretical Implications of Ethnographic Semantics." *Current Directions in Anthropology*, vol. 3.
- 13) GARFINKLE, Halord, *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs, N.J. : Prentice-Hall, Inc., 1967.
PSATHAS, George (ed), *Everyday Language : Studies in Ethnomethodology*. New York : Irvington Publishers, Inc. 1979.
LEITER, K.C., *A Primer on Ethnomethodology*. Oxford University Press, 1980.
- 14) BOHANNAN, Paul, *The Social Life of Man*. New York : Holt, Rinehart and Winston, 1963.
- 15) 山口修／松原武実, 「音楽への民俗意味論的接近——主として徳之島亀津を事例にして」*人類科学*29(1977) : 1-31。
- 16) 山口修「民俗科学（エスノサイエンス）としての音楽学——新しい意味での『民族音楽学』」*音楽学*, 臨時増刊号 (1977) : 45-49。
- 17) VANSINA, Jan, *De la tradition orale : essai de méthode historique*. Tervuren : Musée Royal de l'Afrique Centrale, 1961.
川田順造, 無文字社会の歴史。東京 : 岩波書店, 1976。
DORSON, Richard M., *Folklore and Fakelore : Essays toward a Discipline of Folk Studies*. Cambridge. Mass. : Harvard University Press, 1976. とくに, 第Ⅱ部の "The Oral Process"
- 18) BEN-AMOS, Dan / GOLDSTEIN, Kenneth S. (eds), *Folklore : Performance and communication*. The Hague / Paris : Mouton, 1975.
- 19) BEN-AMOS, Dan / GOLDSTEIN, Kenneth S., "Introduction." ibid : 1 - 7. 引用文は p. 5。
- 20) HYMES, Dell, "Breakthrough into Performance" ibid : 11 - 74. 引用文は p. 18。
- 21) BEN-AMOS, Dan, "Toward a Definition of Folklore in Context" PAREDES / BAUMAN (eds), *Toward New Perspectives in Folklore*. Austin : American Folklore Society, 1972. Reprinted in HAMMOND, P.B. (ed) op. cit. : 358 - 367. 引用文は後者の p. 361。
- 22) BELLWOOD, Peter, "The Prehistory of Oceania" *Current Anthropology* 16/1 (1975) : 9-17. およびそれに対する多くの人のコメント

ibid : 17 – 24, さらにこのコメントに対する原著者の返答および文献表 ibid : 24 – 28.

CAPELL, Arthur, "Oceanic Linguistics Today" Current Anthropology 3/4 (1962) : 371 – 396. それに対するコメント ibid. : 396 – 422. 原著者の返答および文献表 ibid : 422 – 428.

- 23) OLIVER, Douglas L., *The Pacific Islands*. Garden City : Doubleday, 1961.
- 24) FISCHER, Hans, *Schallgeräte in Ozeanien : Bau- und Spieltechnik, Verbreitung und Funktion*. Strasbourg / Baden-Baden : Verlag Heitz GmbH, 1958.
- 25) MCLEAN, Mervyn, "Towards the Differentiation of music areas in Oceania" *Anthropos* 74/ 5, 6 : 716 – 736.
- 26) SMITH, Barbara B. / PLATT, Peter, "Ozeanien" *Die Musik in Geschichte und Gegenwart* 10 (1962) : 520 – 533.
- SMITH, Barbara B./ KAEPPLER, Adrienne, "Pacific Islands" *The New Grove Dictionary of Music and Musicians* 14 (1980) : 57 – 65.
- 27) BURROWS, Edwin G., *Native Music of the Tuamotus*. Honolulu : Bishop Museum, 1933¹, 1971².
- 28) ROBERTS, Helen H., *Ancient Hawaiian Music*. Honolulu : Bishop Museum, 1926¹. Reprint, New York : Dover Publications, Inc., 1967².
- 29) TATAR, Elizabeth, *Nineteenth Century Hawaiian Chant*. Honolulu ; Bishop Museum, 1982.
- 30) MOYLE, Richard, *Samoan Traditional Music*, 2 vols. Ph.D. dissertation, University of Auckland, 1971.
- 31) KAEPPLER, Adrienne, *The Structure of Tongan Dance*. Ph.D. dissertation, University of Hawaii, 1967.
- 32) ZEMP, Hudo, " 'Are 'are Classification of Musical Types and Instruments " *Ethnomusicology* 22/ (1978) : 37 – 67.
- 33) CHENOWETH, Vida, *Music of the Usarufas*, 2 vols. Ph.D. dissertation, University of Auckland, 1974.
- 34) YAMAGUCHI, Osamu, *The Music of Palau : an Ethnomusicological Study of the Classical Tradition*" M.A. thesis, University of Hawaii, 1967.
- 35) MCLEAN, Mervyn, *An Annotated Bibliography of Oceanic Music and*

- Dance. Wellington : The Polynesian Society, Inc., 1977.
- 36) YOUNGERMAN, Susanne, "Maori Dancing since the Eighteenth Century." *Ethnomusicology* 18/1 (1974) 75 – 100.
- 37) TATAR, Elizabeth, "Toward a Description of Precontact Music in Hawai'i" *Ethnomusicology* 25/3 (1981) : 471 – 492.
- 38) Ibid : 483.
- 39) YOUNGERMAN, ibid. : 95.
- 40) 注(29)に同じ。
- 41) パーバラ＝スミスの発案でハワイの東西センターで集中訓練コースが1973年に設けられた。
- 42) 山口修,「事前調査報告Ⅰ」大阪大学創立50周年記念南太平洋学術調査交流計画事前調査報告書, 大阪大学, 印刷中。

(文学部助教授)